

## 第6回 生駒市景観形成基本計画策定委員会 会議録

1. 日時 平成24年5月7日（月） 10時00分～

2. 場所 生駒市役所 403・404会議室

3. 出席者

(委員) 久会長、下村副会長、大原委員、福本委員、植田委員、  
大西委員、樽井委員

(事務局) 吉岡部長、中井課長、西本課長補佐、高谷係長、  
塩崎主任、浅井（以上、みどり景観課）  
坂井、絹原、依藤（株式会社地域計画建築研究所）

4. 欠席者 嘉名委員

5. 会議公開 公開

6. 傍聴者数 1名

7. 案件

(1) 生駒の景観形成の基本原則・構成要素とキーワード（パターン）について

会長：今までの景観基本計画とは違い内容、カテゴリー的にもユニークなものになっている。専門家から見ても難しいと思うところが無きにしもあらず。よく分からないところがあれば忌憚のない御意見をいただきたい。市民、行政、事業者に読んでいただき、使っていたかかないと何の意味もないものになる。

事務局説明（資料1、2、3）

8. 議事内容

(1) 生駒の景観形成の基本原則・構成要素とキーワード（パターン）について

委員：資料3のP.41、沿道空間の連なりのところに「国道168号（北生駒駅付近）」とあるが（東生駒駅付近）の間違い。

会長：4章までいかないと議論し辛いところもある。3章で理解していただき、4章で具体的にどう落とし込むのかという話になる。今はその1歩手前で止まっている段階。

委員：今後、住宅地の屋根形状、色彩について規制や誘導をしていきたいという話になると思う。元々どうあったかという根本原則については理解できるが、新たな大規模住宅開発に対しての誘導方策はこのキーワードから具体的に導き出せるのかよく分からない。

会長：誘導や規制は景観計画の話。その手前で、景観の成り立ちや特性を理解し、こうしましょうという話を次の展開でしていく。キーワードとして出しても、具体的なデザインにどう落とし込めるのかが見えないと、言葉遊びで終わってしまう。今日、皆さんにある程度承認いただければ、事務局はデザインとしてどう落とし込むかという作業に移る。そのとき、これはデザインとして落とし込めないという話が出てくるかも知れない。また、このキーワードがないと具体的なデザインまで落とし込めないということで項目が増えることもあると思う。そのやり取りを次回の委員会までにさせていただきたい。

先日、アドバイザー会議で事業者の方と話した。西に生駒山、東に矢田丘陵があるので「その軸を大切にし、つなぎます」と書いてあるが、デザイン的にどこにそれがあるのかと言われるとよく分からないという話になった。せっかく読み込んでいるのだから、デザインとしてどう受け止めているのかをもう少し大切にしたい。東西の道路沿いに緑を植え、西を見ても東を見ても見える山を、緑でつないでいるというように落とし込んでいかないと書いてあることとやっていることが違うと言われてしまう。地勢の一番大きな話として、谷と山が書いてあるので、それを落とし込んでどうデザインするのかというところまでいきたいと思う。

委員：建前としては分かるが、それを理論的に持っていくことは可能なのか。赤い屋根が合わないとなるのか、緑の中に赤があれば映えるからいいということになるのか。そこに持っていくための根拠がここに必要ではないか。

会長：おっしゃるとおり。ですから具体的に事業者、設計者と対面し話をしなければいけない。我々や市役所の話が思い付きでは聞いてくれるわけがない。景観形成基本計画でこのように書いてあるのでお願いをしているというストーリーが必要。

委員：立派にまとめていただいているが、歴史的、地勢的に見ても生駒にはこういう色彩や形状のものが無いということを整理している部分が少ないように思う。

会長：それは、4章になる。4章で具体的にこのようなデザインが良いという話になる。それを導くための根拠が3章になる。今はそこで止まっているがその辺りの議論は難しいと思う。

委員：生駒の弱点や欠点など、負の部分を改善する用途はなかったのか。

事務局：今回は、問題を見付けそれを改善する方策を立てるための計画書ではない。生駒の良い部分を見ていただき、それを伸ばしていくという計画書を考えている。

副会長：第3章のタイトルが景観形成の基本原則と構成要素となっているが、基本原則の語尾が「今後どうしていくというもの」になっていないか。例えば、地勢でいうと、地形の骨格を認識し「尊重している」と書くのか「今後、尊重するようにしていく」と書

くのかどうか。現状と今後と両方書かれている気がする。4章以降のパターンで今後について書いていくことになるので3章では今の生駒の様子を書けばよいと思うが、基本原則的に山上に建つ住宅景観はこうあるべきだというような、べき論的なものも必要なのかどうか。

会長：編集方針の話になると思う。今は、2章で現状を分析し、3章でそこから導き出されている大きな方針を聞き、4章でより落とし込んだデザインにしていくという3段階構成になっている。副会長の話のように、例えば地勢を横に切り、2、3、4章で書いてある部分が一体になっている方が分かりやすいという考え方もある。4章まで書いてみて、横に切るのか縦に切るのか、大きな編集方針が変わる可能性がある。どちらも考えられると思う。

副会長：山の懐にある集落は水みちにも関係していると思うが、山並みの地形に沿ってできている。そのような風景が構成されていまして書いたとき、それを守るために住宅を建てる時は配慮しましょうと書いた方が横につながっていく。ストーリーとして読みやすいのではないだろうか。次のステップを踏んでから見直すのがいいと思う。

委員：市街地開発の文脈のキーワードに「眺望できる場所」とあるが、生駒の地形を考えると、地勢、場所性、暮らしの営みのすべてに係るのではないか。市街地開発のキーワードに閉じ込めておくというのはどうか。

会長：閉じ込めてはいないと思う。P. 51に「車窓や駅からの眺望」というものもある。例えば、索引で眺望を引くとどこに出てくるか分かるようにすればより明確になるのではないか。眺望という切り口だけを前に出すとまた構成が変わってくる。書くとすれば、地勢のキーワードとして入れるか4章でもう少し書くということになると思う。

委員：普段、走りながら眺望で捉えると色んなものが対象物として見られる。建物の高さ、屋根の形状や色などすべてにおいて眺望という視点から捉えることができる。できれば地勢で書いていただきたい。例えば、山の中腹に建っている家々が地勢に沿った建て方であっても、太陽光パネルなどにより反射して見えることもある。地勢に眺望のキーワードを入れた方が素朴に捉えられ分かりやすくなると思う。

会長：おそらく、4章で地勢に当たる部分を読み込もうと思うと、眺望以外はないと思う。また、河川も眺望の軸である。川筋に建物が建つことはないため軸として残る。富雄川の北の辺りは両側に道路が走っており、眺望が確保できている。更に田園景観もあるのでゆったりと風景が眺められる。この風景をこれからどう確保していくかが富雄川沿いの重要なポイントになる。そういうところも4章で書いておくべき。また、北生駒の駅周辺はこれからどんどん開発されていく。北生駒の駅は1番低いところにあり、今は見晴らしが確保できているが、沿道に建物ができはじめると今の田園風景はかなり変わってくると思う。田園のまま残すのは無理かも知れないが、あの眺望を台無しにしてしまうとせっかくの北生駒のいい景観がなくなってしまうことになる。既にいくつかの店舗が出てきているが、できるだけ道路と建物の間に大きなスペースを取ってもらった方が

今の眺望が確保できていいという話を個別の案件ではしている。それを基本計画できちんと謳ってもらえるとより説得性が高まる。事業者に話すときは今の景観の特性を読み込んで話しているが、それを基本計画で後付けてもらえると景観アドバイザーや市役所で指導する人も根拠ができ、言いやすくなると思う。赤い屋根や太陽光パネルの話が出たが、上から見下ろす目線があるので周りの家並みとの調和が必要という根拠にもなる。

委員：あまり景観に詳しくない人は、2、3章で今の生駒について学ぶことが出来ると思う。そこから4章でこういうパターンにしていくとなるので、学びの部分は読み物として置いておいてもらいたい。4章では、2章の地勢を受けてこれが必要というように用途的なものを入れる章にしてもらえると分かりやすい気がする。

会長：誰が読むのか、どう使うのかによって編集方針も変わってくる。横で切ってしまうとそこしか見ない人も出てくる。非常に効率的だが、他のところも読んでから進んで欲しいという思いもある。行政の内部の人もデザインのガイドラインやマニュアルを作るときに「どこを読めばいいのか」ということを言う。全部読んで欲しい。景観のガイドラインやマニュアルには、この道路はこうしなさいとは書いていない。今までのマニュアルは、この場合はこうすると書いてあったがその前で止められると自分で考えないといけな。それはマニュアルではないと言われることもあるが、まず自分たちで考えて欲しい。

副会長：委員の言うこともよく分かる。確かに、景観を考えていくときに全部を知っていないと話にくいということもあるが、ガイドラインやマニュアル的に使うとなればページのめくり方も変わってくる。もう少し議論してからの方がいいと思う。

山に近いところに建物が建ち、敷地に木を植えるとき、山と建物の景観をいうと同時に在来種に配慮した樹種の統一感ということも必要になるのではないか。外来種を入れてはいけないというわけではないが、メインになる木や並木を作りそうな敷地の樹木は周辺の山に生えている木に配慮した方がいい場所もある。場所性のどこかに入ってくると思う。それが具体的にデザインとして展開できないという話もあったが、緑をネットワーク的に配慮しましょうということ。場所によっても違うが、景観の統一感や連続性につながってくる要素でもあるので、少しでも樹種選定や配置位置など植栽計画やデザインに係る記述が欲しい。

委員：これをどのように活用するかによって、構成の仕方も変わってくると思うが、どうしても文章を読まずに写真を見てしまう。言葉と写真の一体感をもっとチェックしてもらいたい。例えば、P.17の写真は何を意味しているのかよく分からない。P.15の写真と地名も違う。専門家の方はよく分かっているかも知れないが、素人はその部分だけを見てそうした方が良いのかと思ってしまう。

会長：事務局のいい訳の代弁になるが、それらをすべてチェックするのは時間がかかる。今は作業が手いっぱいミスがあるものを出してしまっている。前回も言ったが、写真には色んなものが写り込みすぎており、何が言いたいのか伝わらないところがある。最

最終的に言いたいことが決まったらそれに合わせて写真をもう一度撮り直しに行く作業も出てくる。また、写真で伝えきれないところはスケッチなど別の手段で伝えていくということも重要になってくる。写真やスケッチを見るだけで文章を読まなくても、「なるほど」と伝えきれないといけないと思う。

委員：北生駒の駅前に花を植えているゾーンがあるが、あの部分の写真がない。また、東生駒の駅前では植樹もしており、いい空間だと感じる。現状の「人々を迎え入れる駅前空間」のところで入れてみてはどうか。

会長：また、いい写真があれば提供していただければと思う。

今更の話になるが、北生駒のせっかくの眺望に近鉄けいはんな線の高架が出てくる。橋を軽く見せるなど、もう少しなんとかならなかったものかと思う。

委員：P. 41 の写真にある歩道の茶色い石はどのような計画で作られたのか。

事務局：電線の地中化をした後、代わりに花をハンギングするという計画があったが地元の意見で中止になり石柱だけが残った。

委員：お母さんたちの間では、これは何なのかという話があった。また、先がとがっているのも、もし子どもが頭を打ったら怪我をするのではとってしまう。もし、このような写真を載せるのであれば、その経緯を簡単に書いてもらえればいいと思う。

委員：当初は植樹しようということだったが、地下にケーブルが入るのでできないということでこのようになったと聞いた。それはそれでいいが、何か唐突な感じはする。真ん中に木が植わっていると心地よさを感じると思う。また、石が多いところと少ないところがあり、アンバランスな感じも受ける。美的感覚を導入してほしい。

委員：手前にあるきれいな花壇が見えていない。

事務局：西側は花壇のなかに石柱があるが、東側は唐突に飛び出しているのも違和感を覚えるという意見もいただいている。

会長：本来の計画があったが、地元の人の協力を得られずこうなったということ。本来のところを写真で見せていいと思う。

事務局：この整備事業は県と市と地元の三者協力で考えてやってきた事業であるので書きにくいところもある。

会長：知事から遷都 1300 年祭のときに一番の入り口道路であり、会場のメインストリートの景観があれでいいのかという話があった。そこで、沿道の看板縮小や建物も工夫してもらおうということから入ろうとしたが、地元の人からその前に足元の道路をなんとかして欲しいと言われ、花のポットを置くという提案が出た。誰が管理をするのかという問題があったが、たまたまこういうことが好きな自治会長さんがいたのでお任せすることになった。道路をなんとかして欲しいといった張本人がこの自治会長さんでもある。花好きの自治会長のところこの話がきたことから態度が変わり今に至るということになった。景観を良くしていくには、地元の方と膝を突き合わせてどこまでできるかということを考えなければならない。

委員：花をきちんと守っている自治会には表彰するなど、自治会同士で競争してもいいと思う。最初の設置は市がするが維持管理は住民が行い、街をきれいにするという意識を持つということが大切ではないか。

委員：先程のけいはんなのトンネルの景観というのは山から出てくる部分のことか。

会長：トンネルから出てきて高架になっている部分のデザインが普通という意味。

委員：リニアの話で県に行ったとき、古都である奈良の山に京阪奈自動車道を走らせていいのかという話になると、それを言うなら帰ってくれと言われた。リニアを誘致するとなればそれよりも大きなものができることになる。地下を潜っていく方がいいのか。

会長：地下に埋めろという話は一切していない。高架がやむを得ないのであれば高架のデザインをもう少し工夫できなかったのかということ。例えば、橋脚の間隔を長めにとる、橋げたを薄くするなどいろんなデザインの方法がある。そのような落としどころもあるので白か黒かの判断ではなく、さまざまなことを考えながら総合的に進めませんかということ。リニアが来るのはいいが、もう少し景観的な配慮をみんなで膝を突き合わせて考えた方がいいと思う。理想論を言っているのではなく、1つ1つの案件に対してどこまで折り合いが付けられるかという話をいつもしている。

委員：副会長から樹種の統一性の話があったので関連してお話ししたい。私の住んでいる地域にメタセコイアがたくさん植わっている公園がある。周りの伝統的な樹種とは違う感じがするが、その周辺にはスペイン風の色を使った建物がたくさんある。あの地域のニュータウンが作られた時、そのような街の理念があったのではないか。そのような理念を取り入れながら景観を作っていったらどうか。また、集合住宅があちこちにあり、赤や黄色系の屋根が多く昔の伝統的な村という景色とは違っている。

会長：その街がすべてスペイン風になっているかどうか。それを押し通していくのならそれでも良いと思うが、その景観が滲み出して他に迷惑をかけるということは避けて欲しい。そこだけを見ると綺麗かも知れないが、周辺と重なって見えたとき、おかしいとしないようにして欲しい。例えば、東京ディズニーランドは夢の世界なので外からも中からも見えないようになっている。閉じられた空間ならそのような世界があってもいいと思う。もし、浦安市のどこかから見るとなれば景観の問題になるだろう。

委員：確かに、突出した地域になると違和感があるかも知れないが、地勢との調和を取りながら固有のニュータウンの理念が生かされていけばいいのではないか。

委員：桜井市には、ピンク系のハナミズキの街路樹が多い。生駒の白庭台にあるハナミズキは白系でピンク系は少ない。ハナミズキは外来種だが、時間がたてば在来種のヤマボウシと区分けが付かなくなる。それが街路樹に良いか悪いかは趣味的な話になる。また、個人の美的感覚にはバラつきがあり、この地域にはピンクが合うということまでは書けないのではないか。

会長：それは、私も副会長も景観アドバイスをするときに注意しているところ。個人の好みレベルの話には立ち入らないが、その手前に守ってもらわなければならないことがあ

る。そこを協力してもらえないときには言うようにしている。その境目がここでは分からないといけない。趣味の世界ではなく生駒市にはこのような方針があるので守って欲しいということを3、4章で書き込まなくてはならない。

委員：山側にメタセコイヤやヤシの木を植えると景観的にバランスが取れなくなるが、住宅地の公園の中にそういうものがあったとしても違和感がないと思う。個人の趣味と公共的な話のバランスが難しいのではないか。

会長：「場所」によって違うという前置きがあったと思う。場所性を考えたとき、山際ですぐ裏に山の木が見えるときは樹種を気にして植えないといけないが、街中ではもう少し自由度があるということ。

委員：そうすると、生駒では松の木をはじめさまざまな古来の樹種があるが、大きなニュータウンがあればそこ独自の特色があってもいいということか。

副会長：景観に配慮され始めてまだ間がない。昭和30年以降のニュータウンで景観を考えたところはまずないと思う。堺の大美野地区のように、開発事業者に強い信念があり生垣で街並みを統一しているという例もあるが、私が住んでいる大阪の南の地域でも景観やデザインコードということが言われ出したのはここ20年以内ぐらいである。また、100坪の宅地で4面に緑を設けられるところから、60坪で3面取れたら十分なところ、さらに狭くなり前の通りに面したところだけしか緑化できないところ、など住宅タイプにより様々である。また、宅地規模によって個人住宅の樹種は変わってくる。開発業者がハナミズキを統一して植える場合もあれば個人の好みでバラバラになる場合もある。住宅地が造られたときのイメージが正しいところばかりではない。

会長：コンセプトイメージについては他にも気になるところがある。泉南にプロヴァンスの丘というニュータウンがあるが、泉州の里山に南ヨーロッパ風の街があるのはどう考えてもおかしい。また、周辺からも丸見えになっており問題である。よく建築業者がヨーロッパ風という言葉を使うが、実際には地域や年代によっても違うのでヨーロッパ風という様式はない。偽物を持ってきて欲しくない。海外旅行先で日本風と称したわけの分からないものを見ることがあると思うが、あれをやっているのと同じ。普段からヨーロッパスタイルに馴染んでいないのでおかしいと感じないかも知れないが、そこで生まれ育った人から見ると偽物のデザインに見えるのではないか。それならば、何の伝統もないそれなりのデザインの方がまだましかも知れない。

十数年前、ドイツ人の先生と梅田を歩いていたとき、阪急梅田駅の南側にあったゴシック風のデザインをしている場所を見ていきなり「これはキリスト教会に対する冒とくだ」と怒り出した。ゴシック様式というのは、ヨーロッパの人にとって聖なる空間で使うもの。それをショッピングモールに偽物で作って欲しくないということだった。そういうことも踏まえて、真似ごとのデザインはやめて欲しい。

委員：そういう空間はテーマパークのように見える。何がそこで必要とされている景観なのかという知識がないから、これならかつこよく見えるという考えで造ってしまっている

るのではないか。この計画は、そういうものではなく生駒にはこのようなスタイルの方が望ましいという方向で動いてもらうためのものにしなければならない。では、何が生駒らしいのかと言われると住んでいる自分もよく分からない。今住んでいる家も中古でなんのこだわりもなく住んでしまっている。屋根もオレンジ色だ。じゃあどうしたらいいのか、というところに踏み込んでいくのはすごく難しいと感じる。

会長：ある意味でのトレーニングが必要かも知れない。また、生駒市と一緒に講座を開いたりしなければならないと思う。誰でも、自分が好きなものに対してのセンスはあると思う。ただ、景観はそういうところにまで達していない。私や副会長はずっとこの仕事をしているので違和感があると直感で分かる。それは、説明できない直感ではなく説明できるもの。おかしいと気付くところまでみんなの意識レベルが高まっていけばそんなにおかしいものはできない。何十年もかかることだが、やっていかないといけないと思う。そういう意味で、幼稚園や小学校でデザインや景観の教育をもっと取り入れるべきだと思う。また、先生もジャージではなくちゃんとした身なりで教えてほしい。子どもたちのセンスに埋め込まれるとどうなのかと思う。

委員：美しいと感じる能力に差があるとしても、そう感じるものが何かということがもう少しはっきりすれば、それをベースに何かできると思う。何か基準がある気がする。

委員：今やろうとしているのは、最低限守らなければいけないことではなく、もう少しレベルの高い話になっていると思う。それを目指してアドバイザーなどが導いていくという方向で理解している。今後の運用が非常に難しいと思う。例えば、パステルカラーの建物の規制は彩度、色相からみても難しい。まず、キーワードとしてそぐわないものを示し、次に最低限守って欲しいこと、最後によりよく誘導するというステップを期待したい。

会長：5章の話になるが、どういう形でもっていかもう少し議論が必要。町の方々が集まり、将来こうしようということが話し合わせ、1つ1つのものが出来上がっていくのが理想。それがなく、現状がこうだから、周りがこうだからという理由でこうしなさいとは書き辛い。例えば、80%町家が残っているところに現代的なものをもってこられたらおかしいと言えるが、数軒しか残っていない地域では逆に町家がおかしいものになってしまう。これは難しい話になる。将来的に町家はいらなくなればどんどん現代的に変えていけばいいし、町家を大切にするというならみんな町家に合わせていけばいいと思うが、普通の街に我々はそこまで言えない。しかし、普通の街はともかく、多くの生駒市民が守って欲しいと思っているところについては、言っていかななくてはならないと思う。景観というと難しく感じるが、服のコーディネートならおかしいと分かると思う。それを街に置き換えても分かるようになるには勉強やトレーニングが必要だと思う。全市民がおかしいものが分かるようになるのが理想形。実際に、景観に配慮したまちづくりを始めている地域の人とまち歩きをすると、目が肥えてきているので非常に細かいところまで気付くことが分かる。



委員：生駒台の大きなニュータウンでは先進的な考え方が入っているところもある。そういうところに関してはある程度の理念を考慮するというを入れてもいいのではないか。

副会長：どこのニュータウンでも最低限の街並みへの配慮はある。また、道路沿いや個人の住宅でも緑の風景がつくられている。おっしゃるように、きれいな街並みは多い。しかし、そこに共通のコンセプトがあるのかどうか。開発当時のコンセプトを何十団地も調べるのは大変な作業になる。また、そんなに必要性も感じない。道路幅や敷地規模、道路の先に矢田丘陵や生駒山が見えるというような基本原則は見付けたらいいと思う。基本原則とコンセプトは若干違うと考えている。

会長：生駒台は高度経済成長期のごくごく初期にできたニュータウンで、その時代はまだ色んなことを考えていたと思う。しかし、そこから先はどんどん建てて売るという時代になりコンセプトメイキングや設計をしっかりとするという考えは薄れてくる。時期と誰が開発したのかが分かれば現地に行かなくても大体推測は付く。

委員：今は敷地が広く売れないので切り売りされたりしている。変化の激しい場所なので当時のコンセプトは薄れていっているとは感じる。

会長：それは、生駒台だけではなくお屋敷の宿命。大きな敷地は持ち堪えられないということで分割される。地域の方は、マンションにするのか細分化した戸建てにするのかという選択を迫られる。私は、景観的にまとめることが重要と考えるのでマンションの方がいいのではと進めるが、マンションはダメという声が多い。お屋敷を守るのは敷地を守るということでもあるので、まだ高さ10mの制限のある集合住宅のほうが景観的に馴染む工夫ができると思う。戸建てという様式が大切なのか、敷地の規模が大事なのかを読み込んでいくことが重要と書き込まれていないといけない。ニュータウンについては、そんなに書ききれていない。今後、大規模なニュータウン開発はないという判断で抜かしていると思う。ただ、現ニュータウンの中では建て替えや改築はある。そういうときのガイドラインがいるということならほとんど書き込まれていない。そういう意味では、P. 35の人々を迎え入れる駅前空間の「要素の統一と絞り込み」、P. 37「連歌式」などはニュータウンのなかでも重要なポイントとなる。駅前空間に限らないという形で書き直すというの也被考えられる。ただ、駅前空間だけで書かないといけない項目もある。P. 35以降を共通的な部分と駅前だけの部分に書き分け、工夫することでニュータウンのなかで起こる問題にも適応できるようになるのではないかと。

委員：パターンが難しい。抽象的な表現をするとまずいのか。

会長：クリストファー・アレグザンダーのパターンランゲージを模して書いていると思う。パターンランゲージは、シンプルかつ内容が分かる言葉になっている。要素が何を示しているかがよく分からないので、このような形になっている。これでいいのかどうかは事務局も悩んでいると思う。

例えば、パターンランゲージに「まちなかの昼寝」という面白いキーワードがある。

ちょっと休憩してうとうとできる場所がまちなかに必要だということ。具体的には、ベンチを置いたり、ポケットパークを作ったりというところに持っていくためのキーワードである。すごく分かりやすく面白い、読んでみたくなる。

委員：そんなキーワードがもっとあればいいと思う。具体的な表現になりすぎている気がする。もっとやわらかくて面白い表現の方が受け入れられやすい。

会長：川越市の伝統的建造物群保存地区「一番街」でもキーワードを作っている。その中に「高さはまわりを見て決める」という面白いけれど分かるようで分からないものがある。町家が並んだ地区でマンション問題が起こったときにできたキーワード。バリ島でも建物はヤシの木を超えてはいけないという非常に分かりやすいルールがある。

委員：「生駒山の求心性」というのは分かるがもう少し分かりやすい表現があるような気がする。

会長：事務局もこれから悩まないといけない。皆さんもいいキーワードが思い付いたら出していただきたい。

副会長：先程のメタセコイアとハナミズキの話について。本当は在来種を植えて欲しいが絶対にダメというわけではない。メタセコイアは針葉樹のなかでも落葉するので公園の周辺であっても苦情が多い。ただ、成長が早く針葉樹ではめずらしく紅葉もする。景観的にも悪くないので場所さえ考えればいい木だと思う。ハナミズキは別名アメリカヤマボウシでヤマボウシによく似ている。20年ほど前に流行ったが今はシマトネリコばかり。樹木にも流行がある。ハナミズキも悪くないと思う。よく花のつくときとそうでないときがある。ちなみにピンクの方が値段は高い。やはり、植える場所を考えて植えたならそんなに問題はないと思う。問題がありそうなところは書いておきたいと思う。通りの風景に配慮したもの、山の風景に配慮したものということでもいいと思う。樹種選定や植える場所についてはもう少し後に考えることになると思う。

委員：近所で50戸ぐらいまでの住宅開発をしている。そこに作る公園を、地元の人と新しく入ってくる人でどのような公園にするか考えてから整備して欲しいということを開発業者の方に相談に行った。上手くできるなら協力すると言ってくれたが、現実的には開発許可制度があり、完成しないと確認が取れないようになっている。途中まで作り、分譲後に新住民と一緒に公園を作る方法はないか。

副会長：市とのやり取りの問題では。みんなと一緒につくる公園、コミュニティパーク事業もある。

委員：それならリニューアルになってしまう。

会長：それをキーワードに書いたらいいのでは。P.61にアクションできる余地とあるが、作り込まないということ。作り込んでしまうと余地がなくなる。最低限のことをデザイナーが行い、そこから先は住民の方が活動の中でいいように使いこなして欲しいということ。そういうキーワードが書き込まれていれば開発指導の方にも言える。そのように使えたらいいと思う。色んな話がでたが、一言でいうと「空気を読む」ということでは

ないか。フォーマルな場所にジーンズはおかしい。それを景観ではあたりまえのようにやっていないか。ここはどのような場所なのか、2、3章を市民が読んで分かるようにしたい。私の研究室でそれぞれの時代にどのような花が植えられたのかを調査したことがある。万葉集をみると一番多いのは萩であった。桜井は万葉集の時代に栄えた場所であるので萩が伝統的な木になると思う。そうすると、桜は平安以降になるので植えてはいけないということになってしまう。京都は平安なので桜は植えていいが奈良はダメというのかどうか。それぞれの地域や時代によって植えられたものが違う。それを生かすかどうかはデザイナーや地域の方の話になるが、これを読めばその知識が得られるというのも1つかと思う。

副会長：公園を作るなら、奥ではなく周りの道路から入れることを配慮するとは書きたい。

一番土地が高く売れるところなので難しいと思うが、三角地や外周道路の奥には作って欲しくない。

委員：具体的な仕組みや、開発許可制度まで立ち入るのか。

副会長：そうではなく、みんなで作る公園によって景観的にも利用面でもいい空間ができるということが書けると思う。

会長：ここに何でもかんでも入れてしまうとこれ自体が何か分からなくなってしまう。生駒の特徴を読み込みながらどうしたらいいかということに絞ればと思う。今日の話を知っていると、景観の見方についての副読本が必要と感じた。また、農の風景は色々なことが考えられ、地域も読み込みながら作られている。生駒の市民に分かりやすくお伝えする副読本があれば役に立つのではないだろうか。農の風景には無駄がない。一番効率的に作ろうとした結果、景観も非常に良くなった。然るべきところにあるというのが農の風景。

副会長：農の風景については、もう少し地形を読み込む必要がある。また、ヤマ、ムラ、ノラのセット型の風景を守っていくということが重要。富雄川沿いでも沿道開発が起きている。そうなったときに、どのような配慮が必要なのか、業者の方にも分かるような基本的な考え方は入れておいた方がよい。そういったところが次の展開にもつながっていくと思う。里山と奥山を合わせてヤマでいいのかどうか。里山までをムラと呼んでいる場合もある。どう使うかを確認しておく必要がある。捉えるスケールによっても変わってくるので検討の余地はあると思う。

会長：農村に行くとホッとするというのには理屈が説明できると3章のところでも役に立ってくるのではないか。農村に行くと、人間以外の生き物と暮らしているということが直感として分かる。動植物が生きているから人間も生きていける。また、見晴らしがよくどこにいるかが確認できる。地下街で不安になるのは場所が分からなくなるから。ニュータウンの写真にはどこか分からないという生き物としての不安感がある。そこまでは書ききれないが、言論のようなことが説明できるパンフレットがあればいいと思う。

副会長：生駒の農村集落に生垣が高いところや屋敷林があるところはないのか。先日、散

居村で有名な富山県の砺波平野に行ってきたが、カイニョと呼ばれる屋敷林があり、みんな同じ方向を向いていた。そのような特色があれば書きやすいと思う。

会長：暗峠は生駒山の山系で一番低いところで、そこに街道があるというのは理屈に合っている。

では、今日の御指摘を受ける形で3章を書き改めていきたいと思う。

## 9 その他

### (1) 生駒の景観募集について

### (2) その他

事務局：第6回の開催日程は7月頃を予定している。決まり次第、御連絡させていただく。

以上